

◆ 今週のコメント

- ・ アメーバ赤痢(腸管アメーバ症)の報告が1例あります。本年の累積報告数は15例で、その内訳は、腸管アメーバ症 11例、腸管外アメーバ症 2例、腸管及び腸管外アメーバ症 2例となっています。また、性別は男性 12例、女性 3例、年齢階級別は10代 1例、20代、30代及び60代が各2例、40代及び50代が各4例です。推定感染地域は、国内13例、国外(タイ、イタリア)2例で、推定感染経路は、性的接触が9例(同性間 2例、異性間 6例、不明 1例)、その他 6例です。
- ・ RSウイルス感染症の報告が4例(1歳 3例、4歳 1例)あり、第33週から連続で報告されています。第33週～第41週の累積報告数は27例で、平成16年～平成19年の同時期(0～5例)と比べて、かなり多くなっています。
- ・ A群溶血性レンサ球菌咽頭炎の定点当たり報告数は0.54で、過去5年平均値(0.27)を上回っており、増加傾向を示しています。年齢階級別では、7歳の5例(22.7%)が最も多く、次いで6歳の4例(18.2%)となっています。

◆ 今週のトピックス:<百日咳>

- ・ 百日咳の報告が2例(8歳、20歳以上)あり、本年は、ほとんどの週で報告があります。詳細をトピックスに掲載しています。

◆ 発生状況

全数報告の感染症

- ・ 二類:結核 2例(喀痰塗抹陽性なし、無症状病原体保有者なし)
【1月以降の累積報告数 298例(喀痰塗抹陽性 96例、無症状病原体保有者 29例)】
- ・ 五類:アメーバ赤痢(腸管アメーバ症) 1例【1月以降の累積報告数 15例】

定点報告の主な感染症

(市内定点数 インフルエンザ定点68、小児科定点41、眼科定点10、基幹定点1)

定点	感染症名	定点当たり報告数	報告数
インフルエンザ	インフルエンザ	0.01	1
小児科 (降順5位まで)	① 感染性胃腸炎	2.61	107
	② A群溶血性レンサ球菌咽頭炎	0.54	22
	② 突発性発しん	0.54	22
	④ 手足口病	0.49	20
	⑤ 流行性耳下腺炎	0.27	11
眼科	流行性角結膜炎	0.70	7

病原体情報

ありません。

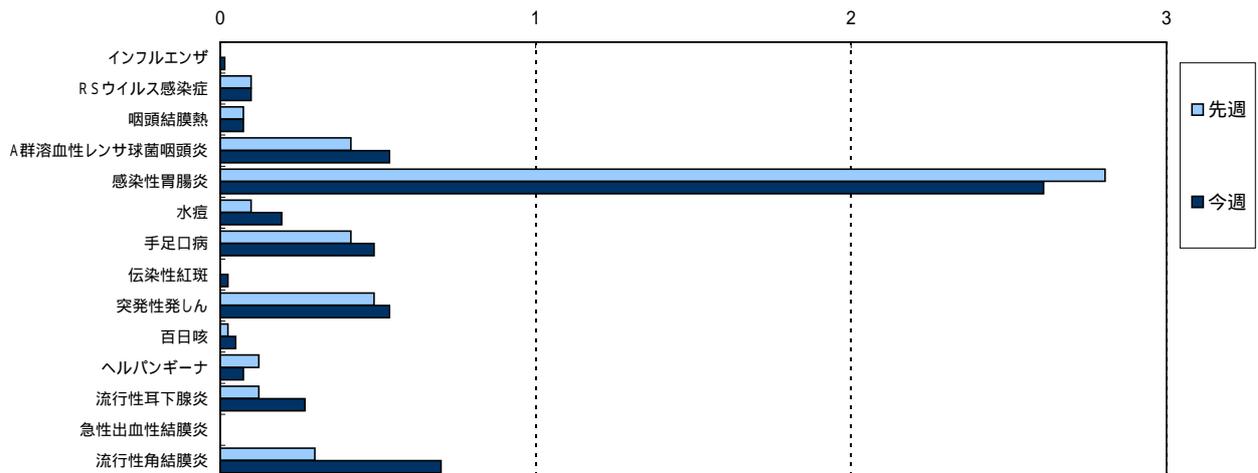
【次ページ以降の主な内容】

発生状況の概況グラフ / 今週のトピックス:<百日咳>

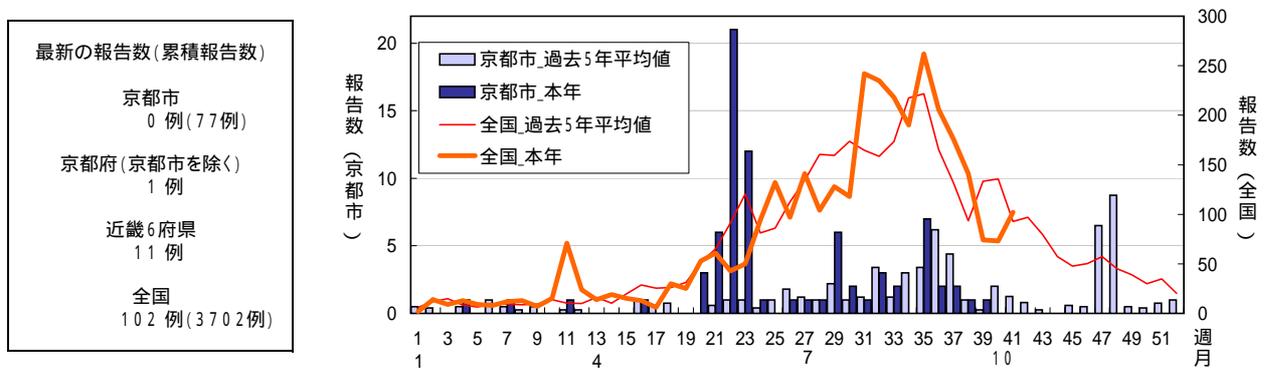
(注) 京都市のデータは、平成20年10月17日現在の報告数で、全国の還元データと若干異なる場合があります。
また、本情報での患者数は、届出医療機関所在の保健所での集計で、患者の住所を示すものではありません。
病原体情報は、病原体定点等から京都市衛生公害研究所へ搬入された検体から検出された病原体です。

発生状況の概況グラフ

1 今週(第41週)と先週(第40週)の定点当たり報告数の比較

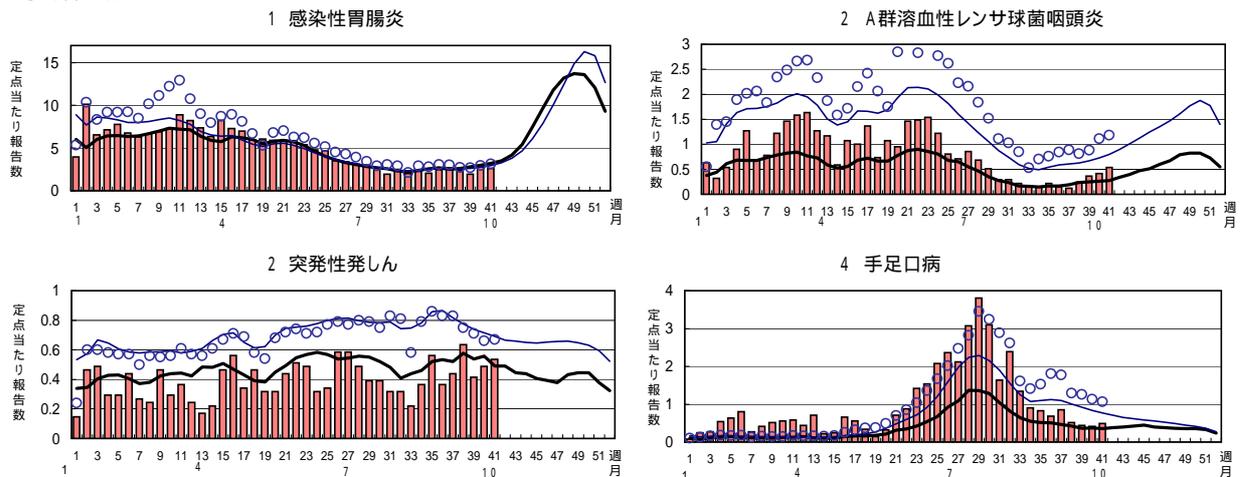


2 腸管出血性大腸菌感染症(三類感染症)の推移

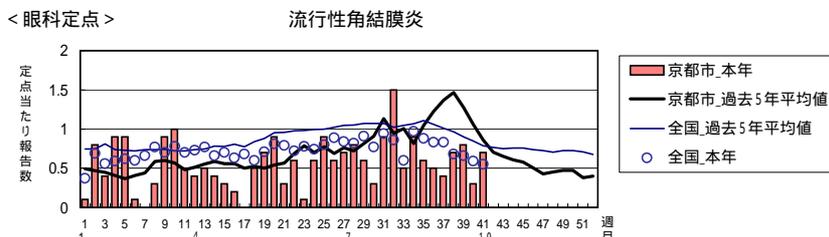


3 主な感染症(小児科)の定点当たり報告数の推移

<小児科定点>



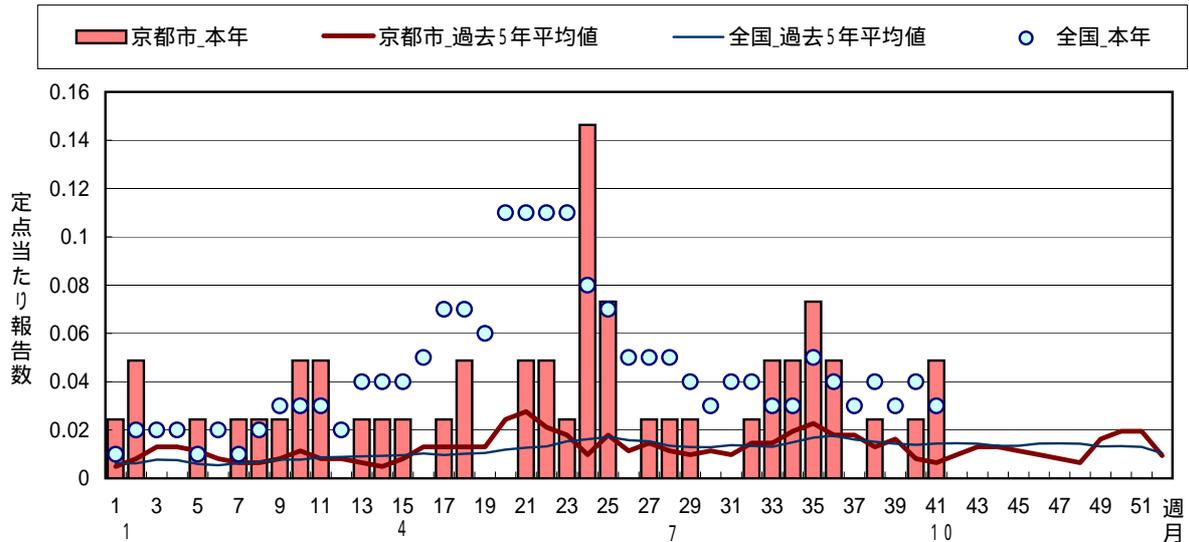
<眼科定点>



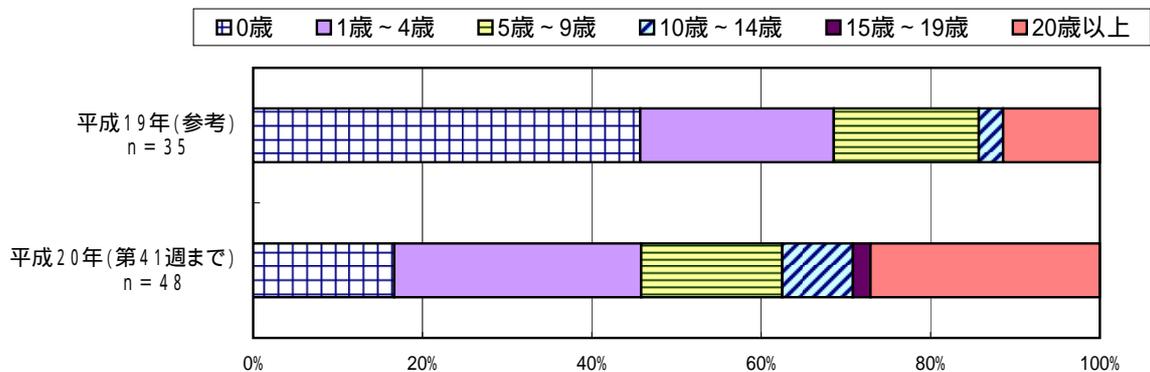
今週(第41週)のトピックス: <百日咳>

百日咳の報告が2例(8歳, 20歳以上)あります。本年は、ほとんどの週で報告があり、累積報告数は、48例で、平成12年～平成19年の同時期(15例～31例)と比べて、最も多くなっています。また、本年は、年齢階級別割合では、例年に比べて、20歳以上(27.1%)の占める割合が多く、1歳未満(16.7%)が、少なくなっています。行政区別定点当たり報告数では、東山区(4.00)が最も多く、次いで左京区及び山科区(2.00)となっています。

本年の定点当たり報告数の推移



年齢階級別割合



本年の行政区別定点当たり報告数

